

## 〔公開講演会報告〕

### 障害者の理解について —— 絵画や文字を通して考える ——

当 島 美代子

この講演会は、愛知県心身障害者コロニーこぼと学園長の医師篠田達明氏を迎えて1993年7月10日(土)にエーザイホールにおいて行われたものであり、そのサブテーマには「絵画や文学を通して考える」とあった。私は、先入観から講演のテーマの具体的な内容を、障害をもった人々の創作した絵画や文学作品から、個々の創作者の心情を知り相互の理解に努めるものと想像して参加したのだが、それはまるで見当違いであった。氏の述べる絵画や文学を通じての障害者の理解とは、人間活動として美を追求する芸術の分野において、作品として描かれている障害者像を知ることであり、人類の文化財である絵画や文学作品を通して障害者の置かれた姿をさぐろうとするものであった。

氏は歴史的に現れてくる障害者像をエジプト石版までさかのぼって紹介し、当時の石版に右足が萎えて尖足となり杖で支えているポリオと思われる人物や、ハーブをかなでる盲人がすでに描かれていることを指摘され、また日本においても、古事記・日本書紀に障害児像として「ひるこ」や「久延比古」が記されていることを指摘された。垂仁天皇の皇子「本牟智知気王」が言語障害であった史実や、「出雲風土記」に描かれている知能障害を有する命(みこと)が「高屋に梯子をかけて登降させて養育し、船に乗せて遊ばせていた」史実を紹介された。また、渡辺華山の描いた巨人症の絵や、ベラスケスの描いた小人症(先天性軟骨無形成症、先天性四肢短縮症)の絵から、当時そのような障害をもった人々が「なぐさみもの」として宮廷等に献上され、またそれ以外の生き方が許されなかった当時の社会通念について解説された。このように古代における障害者観は、「忌むべきもの」、「厄介なもの」、「人間の罪たるもの」、「道化者」という思想の一方、見慣れぬ先天性異常等の障害に対する畏怖の念もあり、障害者療育の芽生えがでてきつつあることを述べられた。日本においては718年に障害者の分類が行われ、奈良時代に既に細かく障害者を分類(重度を篤疾、中等度

を廢疾、軽度を殘疾)し、税金の減免を図っていたことや、鎌倉時代の絵巻「病の草紙」に結核性脊椎カリエスやてんかん大発作、肥満症、脳性まひ、レブラ等の障害をあらわす絵画が残されていることが紹介された。特にてんかんの大発作の絵は、きわめて写実的で、発作の瞬間の患者の表情や周囲の驚きのみごとに描かれ、当時の難病に苦しむ庶民の様子とともに、発作を押えられない医者に対する庶民のあてこすりをも感じさせるものがあった。もっとも当時の医療はハリ、キューウが中心で、そのような治療を受けられる階層もごく一部に限られていたことであろう。

江戸時代になると眼の悪い人が増え盲者が増加する一方、みせもの小屋では水頭症や四肢欠損児、または重度脳性まひ(アテトーゼ型)者が不随意運動で頸が反り返るさまを「さかさ首」としてみせものにされるなどの様子が浮世絵に描かれ、それぞれの絵の中に庶民の障害者観がありありと示されている。他方、時代を変えた人物である豊臣秀吉が多指症(6本指)であった可能性があり、その事実が秀吉に心理的な影響を与えていたのではないかと推測や、明智光秀が強度の近視であり、もしも当時に眼鏡があり信長の表情が十分に読めていたら、歴史は変わっていたかもしれないとの指摘は興味深かった。徳川の歴代の将軍の中にも様々な障害者がいたことが記録されており、綱吉(5代将軍)は身長124cm程の小人症であったことや、家重(9代将軍)は「小便公方」とよばれる脳性まひであったこと、また家定(13代将軍)は知的障害があったことがハリスの「日本滞在記」に記されているなど、興味深い史実の紹介があった。当時は新生児の死亡率が非常に高く、もし生き残ったとしても様々な障害が残ったであろうことが想像される。しかし、一命を取り留めるだけでも庶民には手のとどかぬ医術が施された結果であったことであろう。歴代の将軍のなかに5~6人の障害をもった人物が考えられるそうであるが、その出現の頻度からみても庶民の暮らしの中での障害者の数の多さは想像に難くない。明治になり、戦争による障害者が増加するとともに手足の切断術等も進

んだが、義手・義足の与え方も障害者側への理解にたったものとはほど遠く、権力者の一方的な施策によるものであることが指摘された。

氏は、講演において様々な史実を明らかにされながら、「障害者の理解とは、さりげなく接することが神髄である。ごく当り前の人間として接し合う。」ことを強

調された。私も講演を聴くまではこれらの史実にもうとく、近世 100 年程の障害児教育史しか学んでいなかったが、古代より存在した障害者観が現代まで「差別」という形で継続していることを思い、障害をもった人々と自然体で接し合う大切と難しさを痛感させられた。